

「アクティブ・ラーニング」を活用した衣生活学習の提案実践と評価

Proposal and Evaluation of the Class Focused on Clothing Life Using “Active Learning”

西岡 真弓 今村 律子 赤松 純子
NISHIOKA Mayumi IMAMURA Ritsuko AKAMATSU Junko
(智辯学園和歌山中学校) (和歌山大学教育学部) (和歌山大学教育学部)

受理日 平成 29 年 1 月 12 日

抄録：文部科学省は次期学習指導要領（素案）に「新しい時代に必要となる資質・能力」として、「生きて働く知識・技能」、「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等」、「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性」の3点を示している。これらの力を中学校家庭科の衣生活学習における「アイロンかけ」実習授業で、生徒につけたい力（生活に生かせる知識理解、基本的な技能の習得、意欲の向上）として具現化し、アクティブ・ラーニング型に展開する授業を提案実践し、評価した。アクティブ・ラーニング型授業の展開として、実感を得られる体験の設定、視聴覚教材（紙芝居、ビデオ、解体見本）の活用、相互に見て学びあうグループ学習、思考を深め授業を振り返るワークシートの活用に取り組んだ。その効果は、自己評価・相互評価を手がかりに、学びの高まりとして確認した。

キーワード：「アクティブ・ラーニング」、中学校家庭科、衣生活学習

1. はじめに

次期学習指導要領は2021年度に中学校で全面实施となる予定であるが、その方向性¹⁾について文部科学省は、新しい時代に必要となる資質・能力として、「生きて働く知識・技能の習得」、「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等の育成」、「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性の涵養」をあげている。また、そのような資質・能力の育成のためには、主体的・対話的で深い学び（「アクティブ・ラーニング」）の視点から、学習過程の改善が必要であると示唆している。

家庭科ではこれまでも課題解決学習や実習などの体験学習等を積極的に授業に取り入れることを行ってきたが、中には体験することだけが目的になってしまっている実践も見受けられ、衣生活学習では生活技能の習得と達成感・満足感を教育的意義としている指導実態が報告²⁾されている。実習授業を単に体験するだけでなく理論と結びつけた体験へと転換していく課題がある。その課題を解決するためには、次期学習指導要領（素案）で学習過程を質的に改善するための方法¹⁾として挙げられている「アクティブ・ラーニング」の視点を取り入れることが有効であろうと考える。

アクティブ・ラーニング型授業とは、「一方向的な

知識伝達型講義を聴くという（受動的）学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習³⁾である「アクティブ・ラーニング」を進める型の授業⁴⁾で、「主体的・対話的で深い学び」¹⁾を目指す授業である。家庭科に関する「アクティブ・ラーニング」の先行研究としては、大学生を対象に授業を行い学びの過程を分析したもの⁵⁾や、大学生に中学校家庭科での授業形態に対する意識を調査し分析したもの⁶⁾、高等学校家庭科と小学校家庭科における食生活学習に関するもの⁷⁾⁸⁾があり、いずれの報告にも「アクティブ・ラーニング」の効果が認められたことが記されている。しかし、アクティブ・ラーニング型授業はまだ研究の途上にあり、家庭科に関する報告は数少ない。CiNii Articlesに「アクティブ・ラーニング」、衣生活学習のキーワードを入力し論文検索をした結果では、該当するものは見当たらない。

そこで、本研究では「アイロンかけ」を授業題材に取り上げた。この題材は学校で生徒一人一人が実習しやすく、布・繊維の性質や衣服の構成についての理論とつなげて学習できる点で意義のあるものである。これまで体験するだけになりがちだった「アイロンかけ」実習をアクティブ・ラーニング型授業として展開することで理論と結びついた学びの深まりが実現できると仮定し、授業を構想し実践および評価した。

2. 授業構想について

今回構想した「アイロンかけ」実習授業は、単なる豆知識ではなく、科学性に基づいたアイロンのかけ方を、衣生活にかかわる複数の内容と関連付けながら総合的に学ばせるものであり、この学びによって生活の中で応用できる力を身につけさせることをねらいとしている。「アイロンかけ」実習授業の構想を図1に示した。図中のZone1～Zone4は、「アイロンかけ」実習授業で学べる衣生活の自立にかかわる4つの内容①「アイロンかけ」の必要性 (Zone1)、②しわが伸びる3要素 (Zone2)、③立体構成の衣服 (Zone3)、④衣服購入時のポイント (Zone4) をあらわしている。

授業のおおまかな流れは、次のとおりである。導入段階では、アイロンかけの必要性を衣服の社会生活上のはたらきと関連付けながらおさえる (Zone1)。次に展開では、アイロンでしわが伸びる原理に「熱」、「水分」、「圧力」の3要素が関係していることを理解させた上で、それらと関連する衣生活の自立にかかわる内容を学習または復習させながら、かけ方の意味を考えた「アイロンかけ」実習を行う (Zone2、Zone3)。図1では、「熱」、「水分」、「圧力」と関連する学習内容はそれぞれ矢印でつないでいる。実線の矢印は直接関連する内容で、破線の矢印は発展的な内容である。最後にまとめでは、この授業で学習してきたことを踏まえて、衣服を購入する際は手入れのしやすさも大切な

ポイントであることをおさえ、消費生活の視点につなげる構想とした (Zone4)。教科内容の詳細は「科学的知識に基づいた実習授業の提案」として専門誌に投稿準備中である。

3. 授業実践

題材名を「アイロンを極めよう！」とし、中学2年生を対象に「アイロンかけ」実習をアクティブ・ラーニング型授業として展開した。「アイロンを極めよう！」の授業は、2014年度には1時間の計画で実施したが、指導したい内容に対して時間が足りず課題が残ったため、2015年度に授業時間を2時間 (【基礎編】【応用編】各1時間)に変更して行った。実習材料には、学校制服のワイシャツ (綿50%、ポリエステル50%の混紡)を使用した。授業は各時間とも、「目標の確認」、「学習内容の整理」、「実習の記録・相互評価」、「まとめ・自己評価」の順にワークシートに記入させながらすすめた (図2)。

3.1. 授業のねらい

本授業における生徒につけたい力は次の3点である。

- (1)知識理解：生活に生かせる衣生活の知識「しわが伸びる3要素」、「布・繊維の水分特性」、「布目の向きと性質」について理解させること。
- (2)技能習得：アイロンかけの基本的な技能を習得さ

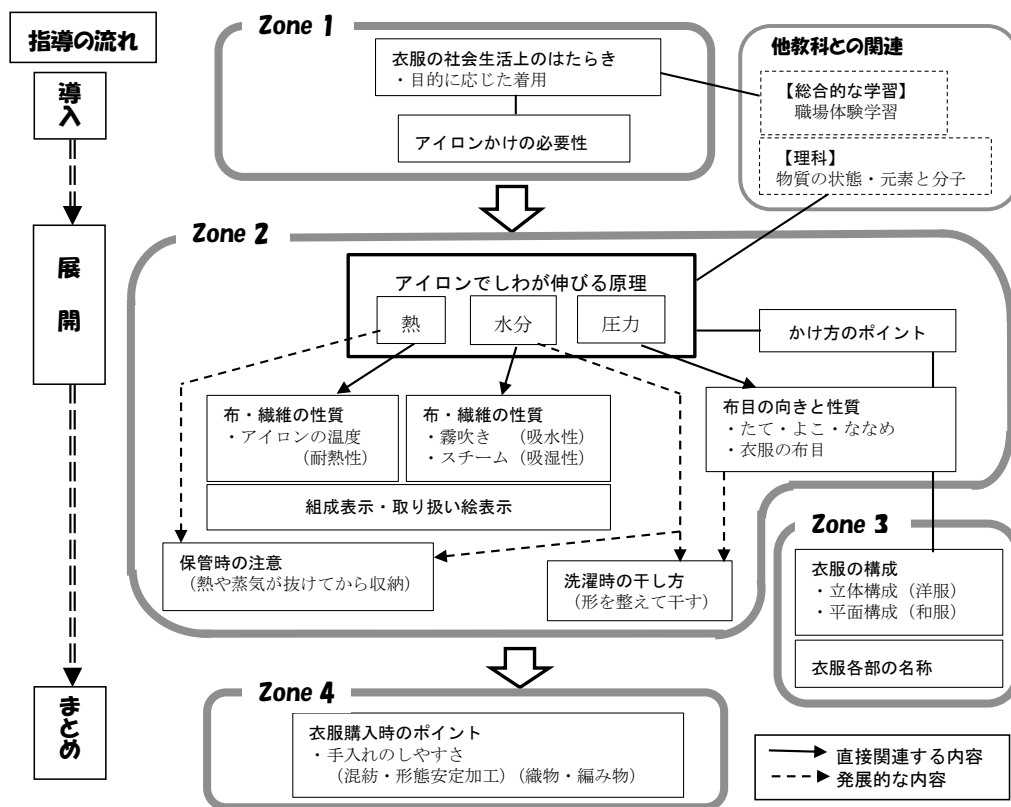


図1 「アイロンかけ」実習授業の構想図

でしわが伸びる原理を理解させた。「繊維分子の紙芝居」は「アイロンかけを科学する!？」のサイト(花王)⁹⁾をもとに著者が3枚の紙芝居に構成したものである。これらの〈体験〉、〈視聴覚教材〉を用いて、アイロンでしわが伸びる原理「なぜしわは伸びるのか」について考えさせ理解させた。実際にしわを伸ばす体験をさせた直後にその科学的な仕組みについて絵を提示して説明することで、生徒の理解を促した。「アイロンかけ」の基本的な方法(手順と動かし方)については、〈視聴覚教材〉「かけ方のビデオ」(和歌山市技術・家庭科研究会制作)を視聴させ、ビデオからかけ方のポイントに気付かせるようにした(図2ワークシート【基礎編】3参照)。ここでは、小学校で学んだ布が伸びやすいのはななめ方向であることを復習し、布目の方向とアイロンの動かし方を学習させた。

2時間目【応用編】では、「繊維の特徴や衣服の構成にあわせて、適切なアイロンかけができる」ことをねらいとし、1時間目の学習を踏まえて、よりきれいに仕上げるにはどうすればよいかを考えさせた。布・繊維の種類によって水分をどう加えればよいか(霧吹き・スチームの使い分け)を〈体験〉「綿と毛の吸水実験」により考えさせ、布・繊維の水分特性を印象付

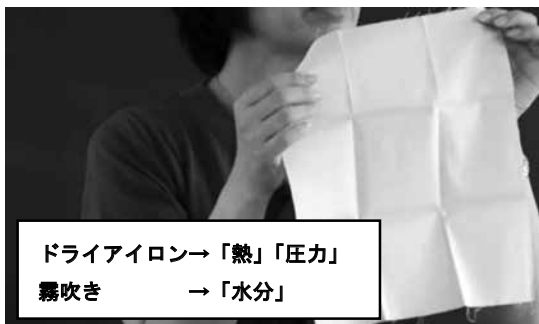


図3 「しわ伸ばし体験」用の布

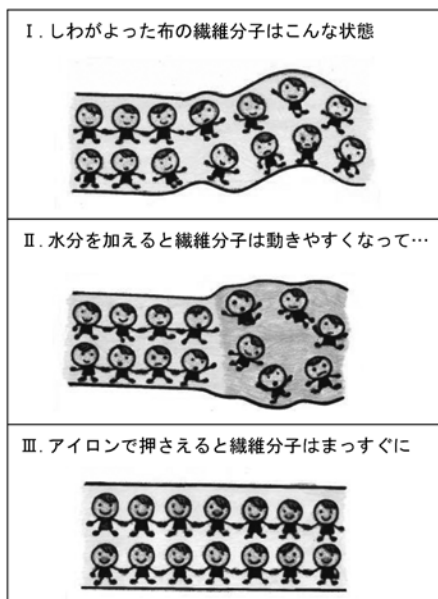


図4 繊維分子を模式図であらわした紙芝居

ける授業を試みた。

(2)技能習得

2時間とも実習はグループで一枚のワイシャツにアイロンをかけさせる形で行い、友達のかけ方を見て対話し評価しあう〈学びあい〉ができるようにした(図5)。

授業にはワークシートを活用し、生徒が学習内容を整理したり、実習で気づいたことや考えたことを記入したりして、各時間の要点と自分が考えたことを確認できるようにした。また、ワークシートには相互評価の欄と自己評価項目を設けた(図2ワークシート【基礎編】【応用編】参照)。

相互評価では、学びあいの効果を上げるために、各時間のねらいにあわせて見るポイントを限定し、ワークシートには観点ごとの到達度を「○△×」で評価する欄と、気づいたことを自由に記述する欄を設けた。見るポイントは、【基礎編】は「アイロンを動かす向き」と「しわが伸びたか」、【応用編】は「布を張ってかけたか」と「きれいに仕上げたか」とした。ポイントをしばって相互評価をさせた結果、単に「上手くできた」、「できなかった」だけではなく、多くの気づきが入力されていた(図6)。

また、かけにくさの問題を解決させることとして、〈視聴覚教材〉「ワイシャツの解体見本」(図7)を用いて衣服の構成を理解させた上で、きれいに仕上げるためのかけ方の工夫を考えさせた。

(3)意欲向上

授業の最後には、その日の学習を振り返り自分の到達度を確認する自己評価をさせた。自己評価は表2に



図5 実習と相互評価の様子

4. アイロンかけをして、自分や友だちのかけ方を評価しよう。

アイロンかけの評価(○△×)	あなたが気づいたこと、工夫したこと	友達のアイロンかけを見て気づいたこと など	
かける部分(袖口・襟)	アイロンを動かす向き	しわが伸びたか	
カフス	○	○	シワが多いうところは長くかけていた
そで	○	△	ほしめところを必ずおしろう
えり	○	○	もちかえりできな
肩ごろ	○	○	面積が広いから大変
肩たて	○	○	ボタン付近がやりにくそうだった

図6 相互評価記入例



図7 ワイシャツの解体見本

示す観点で、それぞれ「A よくわかった (できた)」、「B だいたいわかった (できた)」、「C あまりわからなかった (できなかった)」の3段階で答えさせた。自己評価は、その時間の目標が到達できたことに自信を持たせたり、また自己の課題発見や次の目標を確認させたりするなどの大切な役割を果たすものである。加えて、自己評価によって自分のこととして授業を振り返ることこそが、主体的な学びであり、次の意欲を起こさせることにつながるであろうと考える。

表2 自己評価の観点

【基礎編】	<input type="checkbox"/> 衣服のしわを伸ばすには3つの要素が関係していることがわかったか。 <input type="checkbox"/> アイロンを動かす方向とかける手順がわかったか。 <input type="checkbox"/> アイロンでしわを伸ばすことができたか。
【応用編】	<input type="checkbox"/> アイロンかけできれいに仕上げるコツがわかったか。 <input type="checkbox"/> 霧吹きとスチームアイロンを繊維によって使い分ける理由がわかったか。 <input type="checkbox"/> きれいに仕上げることができたか。

4. 授業評価

4.1. 評価方法

2015年10月～2016年3月に和歌山県内3中学校で、題材名「アイロンを極めよう！」(全2時間)の授業を実施した。授業の評価は、ワークシートの自己評価および自由記述の感想と、授業前後のアンケート調査により検討した。自己評価は2校(WF中学校2年生131人、BS中学校2年生61人)で各授業において回収できた人数を集計した。(YA中学校は独自のワークシートを使用したため集計外とした。) アンケート

表3 授業前後のアンケート調査項目

	授業前	授業後
経験	アイロンかけ経験の有無	授業後の家庭実践の有無
意欲	アイロンかけ上達への意欲	今後のアイロンかけに対する意識
知識理解	アイロンかけについての知識	学習内容の知識定着

調査の集計は、2時間とも授業を受けた生徒(WF中学校2年生121人、YA中学校1年生90人、BS中学校2年生58人、合計269人)についてである。アンケート調査項目を表3に示した。なお、事後アンケートの実施時期は、家庭で実践をする機会を得やすいように考えて長期休業の後とした。(2015年10月～11月に授業を行った学校は冬休み後の2016年1月に、2016年3月に授業を行った学校は春休み後の2016年4月にそれぞれ実施した。)

4.2. アクティブ・ラーニング型授業の評価

アクティブ・ラーニング型授業の効果を、授業のねらいである(1)知識理解、(2)技能習得、(3)意欲向上の3点について評価した。

(1)体験・視聴覚教材活用による知識理解

アイロンかけ知識の実態を事前アンケート「アイロンかけについての知識」(表4)より、授業による生徒の知識理解度を自己評価2時間分(表5)と事後アンケート「学習内容の知識定着」(表6)より、それぞれ分析した。

事前アンケートで「アイロンかけの経験」は「ある」と答えた生徒が74%(199/269人)であった。また、経験が「ある」と答えた199人のうち、立体的な衣服(上衣、下衣あわせて)にかけたことがある者は67%(134/199人)と比較的高い割合であった。しかし、「ア

表4 アイロンかけについての知識

単位：人数 (n=269 複数回答有)

	温度調節	繊維の種類による	の使い方	スチームアイロン	の使い分け	霧吹き・スチーム	かける手順	す方向	アイロンを動か	何もない	知っていることは
WF校	42	27	11	23	49	54					
YA校	30	6	4	16	38	40					
BS校	7	7	6	5	16	32					
合計	79	40	21	44	103	126					
	29%	15%	8%	16%	38%	47%					

表5 各時間の自己評価結果

単位：人数 (%)

	評価項目	A	B	C	無回答
【基礎編】 n=191	3要素の理解	162 (85)	21 (11)	2 (1)	6 (3)
	動かす向きと手順の理解	133 (70)	47 (24)	5 (3)	6 (3)
	しわを伸ばせたか	128 (67)	48 (25)	9 (5)	6 (3)
【応用編】 n=188	きれいに仕上げるコツの理解	139 (74)	33 (17)	5 (3)	11 (6)
	霧吹き・スチーム使い分けの理解	145 (77)	28 (15)	4 (2)	11 (6)
	きれいに仕上げたか	105 (56)	63 (33)	9 (5)	11 (6)

A: よくわかった (できた) B: だいたいわかった (できた)
C: あまりわからなかった (できなかった)

表6 アイロンかけ知識の問いに対する回答者

単位：人数(n=211)

	問題番号と答え				
	①熱	①水分	①圧力	②ななめ	③綿
WF	84	95	77	18	32
YA	64	75	67	48	43
合計	148	170	144	66	75
	70%	81%	68%	31%	36%

(注) BS校は実習室のグループ席で回答させたため、個人の知識理解が正確に測れない可能性があるかと判断し、この集計には入れなかった。

アイロンかけについての知識は表4より、アイロンの温度や、霧吹き・スチームアイロンの使い方と使い分け、かける手順などについては8%～29%しか「知っている」生徒はおらず、47%の生徒は知っていることは「何もない」と答えている。このことから、多くの生徒はアイロンかけの経験はあっても、知識がないことがわかる。

①しわ伸ばし体験と紙芝居

しわ伸ばし体験と紙芝居は、「しわが伸びる3要素」を理解させるのに用いた。「3要素の理解」については、授業直後の自己評価で85%の生徒が「Aよくわかった」と答えており、よく理解している割合が非常に高く、「Bだいたいわかった」とあわせると96%とほぼ全員が理解を示す結果であった(表5)。また、事後アンケートで「アイロンでしわが伸びる3つの要素は何か」の問いに対しては、「熱」70%、「水分」81%、「圧力」68%の生徒がそれぞれ正しい答えを記述できていて、いずれも高い正答率であった(表6)。さらに、実習後に生徒が自由記述で書いた感想にも、「圧力を意識してしっかりかけた」、「弱い力ではしわがあまりとれていない」、「霧吹きをきちんとしているところはすごくきれいになった」など3要素にかかわる気づきや工夫した点が多く書かれていた。以上の結果から、「3要素の理解」については十分な知識定着が得られたといえる。このことは、しわ伸ばし体験と紙芝居による「アクティブ・ラーニング」で視覚や体を使い、頭を働かせながら思考力を深める授業を展開した効果であると思われる。

②吸水実験

吸水実験は、「霧吹き・スチームの使い分け」を理解させるために行った。自己評価「霧吹きとスチームアイロンを繊維によって使い分ける理由がわかったか」については、77%の生徒が「A」と答え、「B」とあわせると92%と非常に高い割合で「わかった」と答えている(表5)。また、事後アンケートでも「水分」については、WF校、YA校ともに一番高い正答率であった(表6)。これらのことから、吸水実験が生徒にとって深く印象に残る体験であったと思われる。

③かけ方ビデオ

かけ方ビデオは「アイロンの動かし方」を学ばせる

場面で活用した。ビデオを見せる前に注目する3点「かける手順」、「アイロンの動き」、「えり・カフスのかけ方」を示すことで、生徒は集中してビデオを見ていた。【基礎編】でアイロンはたて、よこの布目に沿って動かすことや面積の小さい部分からかけていくとよいことを学ばせたが、自己評価「アイロンを動かす方向とかける手順がわかったか」については、70%の生徒が「Aよくわかった」と答え、「Bだいたいわかった」とあわせると94%と非常に高い割合であった(表5)。衣服へのアイロンかけは初めてという生徒が半数程度(135/269人)いたが、ビデオでアイロンの動きをしっかりと観察できたことが理解を深めることにつながったと思われる。

(2)協働学習による技能の習得

【基礎編】では、アイロンを衣服のたて、よこの布目にあわせて動かし、「しわを伸ばす」ことを目標とした。自己評価「アイロンでしわを伸ばすことができたか」については、67%の生徒が「Aよくできた」と答え、「Bだいたいできた」とあわせると92%と非常に高い割合であった(表5)。

【応用編】では、1時間目の基礎的なアイロンかけの学習からレベルアップし、「きれいに仕上げる」ことを目標として、衣服の立体構成を意識してパーツごとに、また布を張るようにしながらアイロンの先も上手く使ってかけることを指導した。また、自己評価「きれいに仕上げることができたか」については、「Aよくできた」と「Bだいたいできた」とあわせると89%と高い割合であった(表5)。以上のように、技能習得に関して「A」または「B」と回答した生徒は【基礎編】92%、【応用編】89%であり、アイロンかけの基本は押さえることができた。

また、ワークシートの記述には「友達の言うとおりの布目にそってかけると上手にできた」、「えりは半分かけてから逆からかけると良いと友達から言われた」などがあり、お互いにアドバイスをしあう協働学習の対話的な学びが、技能の習得の一助となったと思われる。

(3)将来に生かそうとする意欲

授業前の「アイロンかけ上達への意欲」と授業後の「アイロンかけに対する意識」を表7に示した。授業前後の意欲の有無はほぼ同数であったが、一人一人の意識の変化をみると、「上達したいと思わない」から「今後かけようと思う」に意欲が向上した者は22人いた。実習後の生徒の感想にも、友達が上手にかける様子を見て、「自分もできるようになりたい」という技能向上への意欲をあらわす記述があった。これらの生徒は、授業を受けてアイロンかけの効果と必要性を実感したことや、グループ学習で上手くかける生徒の様子を観察したことにより、「機会があればかけてみよう」という意欲の高まりにつながったと思われる。また、これらの生徒に加えて、授業前と変わらず授業後も意欲

を持続けた生徒が269人中約200人いたことは、本授業の成果のあらわれと思われる。

しかし、授業前「上達したいと思う」から授業後「今後かけようと思わない」に変化した者が23人いた。この23人について、授業前の「上達したいと思う」理由(図8)と授業後「今後かけようと思わない」理由(図9)を抽出した。

図8より、授業前「上達したいと思う」理由としては、「将来のため」にアイロンかけを身につける必要性を感じている回答が74%(17/23人)と多かった。一方図9より、授業後「かけようと思わない」理由としては、「かける必要がない」と答えている者が、57%(13/23人)で一番多かった。この「かける必要がない」には、かける必要のある衣服がないという理由と、家族の誰かがかけてくれるのでかける必要がないという理由の両方が含まれている。

表7 アイロンかけに対する意欲の変化

授業前	授業後			
	かけようと思う	思わない	無回答	
上達したいと思う	222	197	23	2
思わない	47	22	25	0
無回答	0	0	0	0
合計	269	219	48	2

単位：人数

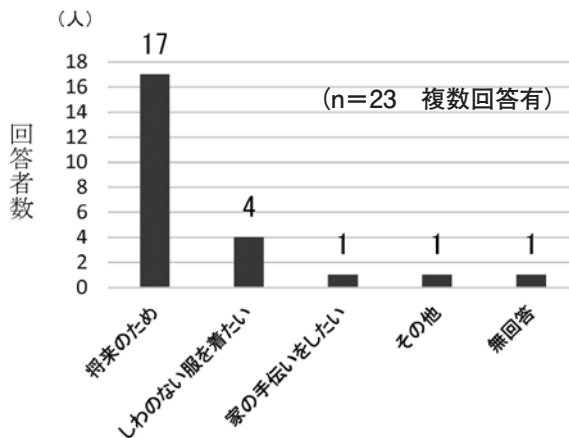


図8 「上達したいと思う」理由

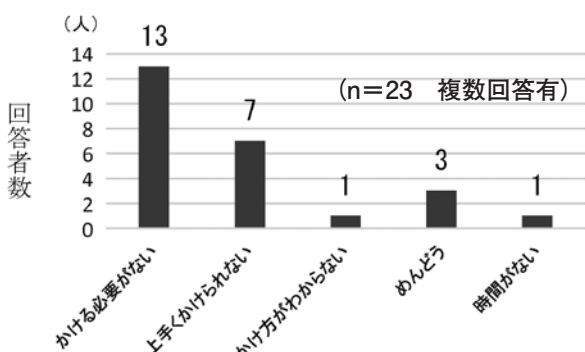


図9 「かけようと思わない」理由

以上のことから、授業前は上達への意欲があったが、授業後に「かけようと思わない」と答えた者の5割強は、アイロンかけができないわけではなく、知識・技能の習得はできていて、現段階の実生活では「かける必要がない」と判断したと思われる。

4.3. 授業実践改善の課題と展望

(1)知識理解

事後アンケートで「霧吹きを使った方が効果のある繊維」を記述させた結果は、授業で学習させた「綿」と答えた者がわずか36%しかいなかった(表6)。これについては、本授業までに繊維の名称やその性質がよく理解できていなかったために、知識として定着させることができなかったものと思われる。今後は「アイロンかけ」実習授業に限定するだけでなく、衣生活学習全体について衣生活の自立に必要な内容をどう配列し、どんな授業展開をしていくか、指導計画を検討していくことが必要であると思われる。

また、事後アンケートで「アイロンを動かす時によくない方向は布のどの方向か」の問いに対して、正しく「ななめ」と記述できた者は31%と低く(表6)、課題が残る結果であった。WF校では、「ななめ方向は布が伸びるのでななめにアイロンを動かさない」との教師の説明はあったが板書がなく、ワークシートに記入できていない生徒が多かった。また、2014年度の試行実践では同じ説明の場面で、教師が布をななめに引っ張って見せ、生徒もそれを見て布を引っ張る様子が見受けられた。板書計画や説明方法などの授業細案をつくることで、教師誰もが質の高い効果的な授業を行える提案になるものと思われる。

(2)技能習得

事後アンケートで「立体である洋服をアイロンできれいに仕上げるコツ」を記述させたところ、「部分ごとにかける」や「布を張る」などのこちらが期待するような答えを書いている者は14%(29/211人)で、全く何も書けていない生徒が大半であった。授業直後の振り返りでは、自己評価「きれいに仕上げるコツがわかったか」について、「A」、「B」あわせると91%と非常に高い割合で「わかった」と答えており(表5)、授業での目標はおおむね達成できたが、時間が経過すると忘れていたことがわかった。これについては、事後アンケートの問い方が不十分で回答しづらかったことや家庭での反復をしなかったことなども一因であろうが、布の性質や衣服の構成をおさえながら「なぜそうかけるのか」の強調不足も関係すると思われる。

自己評価「きれいに仕上げることができたか」については、「Aよくできた」と「Bだいたいできた」とあわせると89%と高い割合であったが、「A」だけを見ると56%で、他の項目と比べると一番低かった(表5)。生徒の中にはアイロンで新たなしわをつけてし

まった者もあり、技能習得については若干の不十分さが残った。2時間の授業の中で伝えたい内容が多かったために一人一人の実習時間が短かったことが原因であると考えられ、指導内容の精選と時間配分が課題であることが明らかになった。一方で、実習後の生徒の感想には、「友達がアイロンの先を上手く使ってかけていた」、「しわを整えるとかけやすそうだ」、「そでは縫い目に形を合わせていた」、「左手を置く位置に気をつけると良い」などきれいに仕上げるコツにつながる気づきが記されていたので、これらを生かした説明の工夫も必要であると思われる。

(3)意欲向上

授業前「上達したいと思う」から授業後「かけようと思わない」に意識が変化した23人のうち、「かけようと思わない」理由として「上手くかけられない」、「かけ方がわからない」と答えている者は30% (7/23人、複数回答1人含む) いた (図9)。これらの生徒については、授業で目標が達成できずアイロンかけに対する意欲が低下したものであると思われる。実際に、実習時間は【基礎編】、【応用編】のいずれも一人につき2分程度であったため、技能面で課題が残った。どの生徒も目標が達成でき、次の意欲につながるような授業の進め方の検討も必要であると思われる。

5. まとめ

文部科学省は次期学習指導要領 (素案) に「新しい時代に必要となる資質・能力」として、「生きて働く知識・技能」、「未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等」、「学びを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力・人間性」の3つ¹⁾をあげている。その方向性を具現化した「アイロンかけ」実習で、生徒につけたい力を「生活に生かせる知識理解」、「基本的な技能の習得」、「意欲の向上」としたアクティブ・ラーニング型授業を提案実践し、評価した。その結果、次の成果を得た。

- ①これまでかけ方の体験だけを目的にすることが多かった「アイロンかけ」実習授業を、アクティブ・ラーニング型授業として展開し、体験や視聴覚教材を活用しながらかけ方の意味を深く考えて学ばせる授業の提案実践を行った。
- ②「アイロンかけ」実習に協働学習 (一枚のワイシャツをグループで分担してアイロンをかける学習形態) を取り入れ、ワークシートを使った相互評価を工夫することにより、時間を有効に使いながら対話的で相互に学ばせることにつながったと思われる。
- ③意欲喚起のために自己評価で各時間の授業内容の振り返りをさせ、自分の到達度を確認させた。

- ④アイロンでしわが伸びる3要素についての理解度が高かった。中でも「水分」については知識定着が最も高く、しわ伸ばし体験、紙芝居、吸水実験など生徒が主体的に学ぶアクティブ・ラーニング型授業を行った成果であるといえる。アイロンかけの方法や技能についても基礎的な内容はおおむね習得させることができた。より一層技能を熟達するには、反復練習など十分に体得させることが必要である。
- ⑤授業後もほとんどの生徒が今後もアイロンかけをしようという意欲をもつことができたことは、「学んだことを人生や社会に生かそうとする学びに向かう力」と考えられる。

謝辞

本研究はJSPS 科研費 JP26282011 の助成を受けたものです。

文献

- 1) 文部科学省 (2016)、中央教育審議会教育課程企画特別部会資料1「次期学習指導要領に向けたこれまでの審議のまとめ (素案) のポイント」
- 2) 多々納道子・竹吉昭人 (2006)、家庭科教員の指導実態からみた製作活動の教育的意義、島根大学教育学部紀要 (教育科学)、39、p. 19-24
- 3) 溝上慎一 (2014)、『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』第1章アクティブラーニングとは、東信堂、p. 3-23
- 4) 河井亨 (2015) アクティブラーニング型授業における構図の解剖と縫合、京都大学高等教育研究、21、p.53-64
- 5) 佐々木信子・小松国子・小栗美香子・瀬尾知子・菊地教子 (2016)、家庭科教育におけるアクティブ・ラーニングの学びの過程—KH Coderによる授業分析—、秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要、38、p. 51-57
- 6) 森田清美 (2016)、中学校家庭科における能動的な学習の展開、比治山大学・比治山大学短期大学部教職課程研究、2、p. 167-173
- 7) 岡崎隆子 (2014)、主体的に食生活を営む力を育成する高等学校家庭科の食育指導に関する研究—他教科の視点を取り入れたアクティブ・ラーニング型授業を通して—、長期研修報告書、やまぐち総合教育支援センター、p. 85-96
- 8) 植田遥菜・多々納道子・竹吉昭人 (2015)、小学校家庭科におけるアクティブ・ラーニングを活用した食材を選ぶ力の育成—みそ汁づくりを題材にして—、島根大学教育学部紀要 (教育科学)、49、p. 17-25
- 9) 花王くらしの研究 生活者研究センター、「アイロンかけを科学する!?!」、<http://www.kao.co.jp/lifei/couple/iron/contents/01.html> (最終閲覧日 2016.10.26)